

## 日本文化研究史上の革命 : 日本学研究の方法論に関する思索

著者	高 増杰
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	2
ページ	37-52
発行年	2005-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022565">http://doi.org/10.15002/00022565</a>

# 日本文化研究史上の革命

## —日本学研究の方法論に関する思索—

高 増杰

### 一、方法論についての思索

中国では、日本研究が20世紀80年代初期から再開してから、方法論の問題が随分議論されてきた。振り返って見れば、日本文化を対象とする研究作業は80年代前まで殆どふれられていなかったと言ってもよい。60年代の初頭には、日本研究が広がったように思われるが、その時、学界では主として明治維新を中心にして論争を交わしていただけで、外の分野の研究はそれほど展開されていなかった。その後、まだ深まっていないところ、プロ文革が起こって、研究作業が中断された。十年のブランクの後、70年代末頃から、日本に関する研究が再び展開されてきたが、最初の段階には日本経済の高度成長に議論が集中していた感が強かった。学界全体の動向を見れば、最初は経済の高度成長についてその原因を探ってみようとしていた。もちろん、その場合さまざま方法論的にも種々の手法が応用されていたが、主として経済の仕組みを対象にしていたので、経済学的手法が当然中心になっていた。80年代の中頃に近づくにつれて、単なる経済の仕組みだけではどうも説明がつかないところがあることに気づいた研究者が多くなってきた。経済活動における人間の役割が視野に入ってきたのである。要するに、日本を研究するにあたって、人間を見逃してはよく分からないことが浮彫にされてきた。おおよそ1982年前後から日本学研究的の学界では、文化的側面に光をあてて勉強しようとする動向が顕著に現れてきた。この時から、中国の日本文化研究が本格的に展開されようとしたと言えるであろう。

日本文化研究の気運が現れたと言っても、如何に研究活動を展開するかが大きな課題になっていた。当然、方法論の問題も大いに意識されていたが、それ

は相当難しい思考の作業であった。極端的な話をすると、中国ではそれまでに日本、特にその社会の仕組みを対象とした記述があることはあったが、近代的な研究方法を活かして日本文化を対象として研究したことは非常に稀と言わざるをえなかった。古代中国の魏志『倭人伝』がよく知られているし、明と清の時代にも日本旅行記如きものも数多くあった。しかし、近代的学問のジャパノロジーと現代的な日本研究になると、先行研究が少なく、何らかの形で参考にしようとしても相当難しかった。当時の研究作業を振り返って見ると、日本文化を研究しようとする有志の人たちは種々アプローチを試みようとしていた。まず、近代の日本文化研究の歴史を洗いなおして、その移り変わりのプロセスを把握しようとしていた。その上、変化の節目に当たるいくつかの研究を対象にして、当時の研究全体の動向と絡み合わせて、その研究方法に綿密にメスを入れていた。このような作業を通じて、先行研究者の問題意識とその姿勢がある程度明らかにされたと同時に、研究の方法論も注目的となっていた。

研究方法の問題になると、従来さまざまな認識があったが、巨視的にとらえれば、文献的研究と現実的考察との二通りに大別される。われわれの世代で言うところには現実的考察が殆ど不可能で、若い時には主として文献学的手法で日本を理解しようとしていた。しかし、非常に限界があった。書物、特に研究書を入手することさえそう簡単にできなかった。そして、それも政府の刊行物が中心なので、普通の国民の生活等については皆目想像もできなかった。例えば、商業流通を例に取り上げて見れば、高度成長期には経済がこの上なく繁盛で、店にお客様が満ち溢れるほどいるのではないかと勝手に想像していた。後から分かったが、多くの店はガランとしていて商売がよいが、われわれ自身の経験とはまったく異質のメカニズムがある。こんな見当違いに気がついて、最初の時に本当にびっくりしていた。要するに、文献的資料による研究はある程度方向をつけることができるかも知れないが、往々にして現状を知らず、見当がはずれてしまって、とんでもない誤解になる恐れがある。そこで、注目したのは、フィールド・ワーク (field work) である。

1980年代の初期には、まず日本文化研究の方法の基本としては、現実には密着し、そこから出発して文献を理解することが重要であるという共有意識ができてきた。そこで、フィールド・ワークは重要な研究手法として注目されていた。

種々調査と思索を行った結果、日本研究に導入されたものとして、既存の学科には最もフィールド・ワークを重要視するものがあることが分かった。文化人類学である。色々あさった結果、文化人類学の基本方法論をまとめた書物を見つけ、すぐにこれを一種の参考として当時の有志を集めて研究会を開いた。着々と講読しながら議論して、その15種類の研究手法と研究理論を一々討論を活発に行った。そして、研究会の成果を踏まえて、もっと多くの人たちに知られるように、『文化人類学15の理論』を中国語に翻訳した。実は、翻訳の過程も一種の研究作業になって、思索を深めて、現実に着目して、綿密な調査を行う研究方法への理解を深めた。

もう一つ、文化人類学者が書いた日本論の書物が現にある。ルーズ・ベネディクトの『菊と刀』である。彼女は文化人類学者で、その手法で種々研究成果をあげた。その中の一つはこの本である。そして歴史的な経緯によって、この本はよく読まれて、「古典的」なものとなされている。そこで、研究会では『菊と刀』を中心にして、彼女の日本論を議論しながら、その研究手法を俎上に乗せて解析していた。残念なことには、ルーズ・ベネディクトは時代の制約によって日本での生の経験を持っていない。しかし、インタビューや、事例調査等を行って、変則的なやりかたではあるが、一種のフィールド・ワーク如き手法で研究作業を行ったと言える。われわれは日本文化研究の最初の段階でこの文化人類学的手法を研究の道具として、文献よりも現実と生の社会を対象にして研究していく基本原則を決めたわけである。

しかし、ルーズ・ベネディクトの日本研究は古典的な意義を持っているかも知れないが、必ずしも現代の日本研究の条件と合致しているわけではない。日本社会への接触が簡単にできる現今、日本研究の姿は大きく変わりつつある。そこで、私と同志たちは60年代のライシャワーと70年代のヴォーゲルに注目して、彼らの研究成果と研究手法にメスを入れていた。時間軸的に見れば、ライシャワーの研究は60年代にアジア諸国で大きな反響を呼んだし、研究方法も学問の基本としての歴史的研究手法を中心としていた。巨視的に把握し、全体像を描き、一つの流れとして日本を見る。人々はライシャワーの著書を読んで、目の前に日本のイメージが浮かび上がってくる。一方、70年代に入ると、ヴォーゲルは社会学的手法を用いて、日本社会の細部を一つ一つ切りぬいて解析し、

読者に細部の日本をひとこま、またひとこま見せてくれる。幸いにヴォーゲルは日本の全体像の中でのそれぞれのこまの位置を指示して、モザイクの全体像とそれぞれの粒の微視的世界の両方をバランスよく取り扱っているので、誤解を生じることは殆どない。結局、この二つの手法も当時の研究会で大いに議論の内容となっていた。これらは日本文化研究の枠組みを作るためにたいへん役立つもので、いずれも中国の日本文化研究に影響を及ぼしたものである。

当時、中国の日本文化研究が再出発したばかりで、日本文化を対象として研究作業を進めていたのは、研究グループとして、中国社会科学院日本研究所社会文化研究室しかなかった。私は日本文化研究推進のため研究会を開きながら、常に各地に散在している日本文化研究の有志の研究者たちを集めて、シンポジウムを開催したり、研究集会を行ったりして、全国的ネットワークで日本文化研究に関する情報交換をすると同時に、研究内容と研究方法等を含めて、われわれの考え方を伝えて理解を求めている。一方では、各研究者の研究活動に照準をあてて全体的に把握し、他方では、日本文化研究、特に方法論についての思索を深めていた。その中、日本文化研究の原則としての現場考察志向が確認され、また方法論の思索も徐々に共有されるようになった。その一環として「日本文化研究史上の革命——日本学研究の方法論に関する思索——」を題とする公演やら談話が数回にわたって行われた。後に年数をかけて思索を深めて手を入れたのが学会誌に載った同題の論文である。今から見れば、なんでそんな細かいところにこだわっていたのか、むしろ不思議に思うかもしれない。しかし、日本研究再出発の時点で、むしろこの方法論の思索は悩みの種であったし、また大いに研究を前進させる大きなバネになっていた。その当時（1990年）の考察には次のいくつかの部分が含まれている。

## 二、「ライシャワー」の研究方法

### ——60年代以前の日本文化研究の基本方法

90年代初期には、わが国の日本学研究は、非常に速く発展し、研究成果も増えてきたし、レベルも高まった。これまでになかった局面が現れている。しかし、一部の専門家は、日本研究には一定の恣意性があって、少なからぬ研究成

果にある種の主観的な傾向さえ現れたと指摘している。筆者は、日本研究の健全な発展を促進するため、研究の方法論問題を重視すべきであると思い至った。この一文は、主として70年代の米国における日本文化研究の動向についての一考察で、我が国の日本学研究方法論の検討に役立つ端緒になれば幸いである。

第二次世界大戦の終結後、諸外国の日本学研究界においては、米国の日本研究が方法論の更新を重ねてきたし、明確な社会機能を果たしてきたので、極めて重要な地位を占めているように見えている。まず、ルーズ・ベネディクトは、文化人類学の研究手法を日本研究に導入し、新しい潮流を巻き起こし、追随する者も数多く育てた。その後、彼女が早死して有力な後継者がいなかったし、現実的需要の変化も要因となって、米国のE・O・ライシャワー教授の巧みな歴史学研究手法による日本研究が展開されて新風を吹き起こし、次第に一学派が成立し、60年代から70年代にかけて日本文化研究の主要な学派の一つとなった。この時期には、米国、ヨーロッパ、東南アジア及び日本では、前後して類似の研究方法で日本研究を展開する研究者が輩出し、ライシャワーはこの時期の日本学界に極めて大きな影響を及ぼした。

ライシャワー（1910—1990）を代表とするこの日本研究学派は、方法論から言えば、基本的に歴史的な総体分析方法を使っていた。検討を進める上での便宜を考えて、とりあえず「ライシャワーモデル」と呼ぶことにする。ライシャワーの日本研究の内容は、既に広く知られているので、この論文では重複を避け、その概要を方法論の角度からまとめたいと思う。

第一、近代日本研究が社会的な機能を強めていく面から見れば、ルーズ・ベネディクトの日本研究が社会的機能を強めてきたが、ライシャワーのそれはその延長線上にある。ライシャワー本人は日本研究に従事する学者だけではなく、米国の対日戦略計画の作成と工作の要員でもあって、具体的に米国の対日工作にかかわっていた。生涯の大半は日本研究に従事したが、同時に、長時間にわたって米国駐日大使も勤めていた。その著作『日本人』は、長年の心血を注ぎ、数回も修改正されて出版を重ねた書物で、日本に対する彼の基本的な見方を示し、その対日工作の基本的な指導思想を成している。その力作である『日本近代化新論』は、米国の対日援助政策を転換した陣営内でめぐらした策というだけでなく、米国の対日方針及び同盟国戦略の基盤の布石でもあった。ライシ

チャーモデルの日本研究は基本的指導思想上、十分に研究の社会的機能を強調している。

第二、ライシャワーモデルの日本研究は、基本的に学術研究に属しているもので、政策研究ではない。その研究は学術領域において歴史学の範疇に属し、研究の基本的方法は歴史学手法である。彼は歴史学的な全体総観と総体分析の方法論で研究の結論を出して政策研究の基盤となさしめた。ライシャワーの研究は米国の対日政策と密接な関係にあるが、政策の解説ではない。そのようになり得たのは、ライシャワーモデルの日本研究の学術性に由来するもので、政策性ではない。『日本人』は彼が歴史学的手法によって忍耐強く日本文化を描出したり分析したりした著作で、日本の天皇制と国民性について精緻な見解を提示し、米国の対日政策を設定する基盤の一つとなった。『日本近代化新論』は学術研究の立場で、日本の近代化が急速に発展した背景と原因を探求したが、日本及び同盟国に対する米国の経済援助を減少させた直接の理論根拠となった。ライシャワーモデルは学術研究と政策研究の、附かず離れずの関係を示して、日本学史上の意義深い実例であると言えよう。

第三、ライシャワーモデルの研究方法は基本的に総体分析である。この特徴はライシャワー本人の研究経歴に極めて深くかかわっている。彼は中国で生まれ、幼少期を中国ですごしていた。目で見、耳で聞いて、東洋文化の薫陶を強く受け、東洋文化、特に中国文化にたいへん深い造詣があって、理解も深い。中国古代の学術研究様式、特に全体を総観し、高所から俯瞰して、主幹を重視して、枝にとらわれないという歴史学の研究姿勢は彼に強い影響を与え、彼の歴史学様式の研究方法来に反映されている。その最も重要な基本特徴の一つは、研究対象の日本を一つの総体と見做し、特に文化背景を重視し、歴史の長い川に沈積している日本人と日本文化の伝統を掘り起こそうとして全力を注いだ。そのためか、彼の日本人及び日本文化に対する姿勢は、基本的に謳歌と賛美で、特に伝統文化の精神的要素を重視した。日本近代化問題の探求に際しても、彼はヨーロッパ中心主義の基本を堅持しつつ、日本は「西洋化の優等生」と見做して、日本民族の伝統文化、心理、精神と価値体系を賞賛し、これこそ日本が欧米を追い越した独特の条件であると考えた。伝統文化とそれに内在する素因を重視し、研究対象を全体的に把握するのが、ライシャワーモデルの日本研究

方法の精髓であると言えよう。

客観的に見れば、ライシャワーモデルは現代の日本研究史で一種の中継ぎの位置にあると言ってもよい。書齋から社会的機能を求める研究過程においては、既に象牙の塔から歩き出ているが、まだ学究的な様相を保っている。研究方法論では、古典的な日本学の全体把握の姿勢と構造を保持しながらも、具体的且つ部分的な問題にも細心の注意をはらっていた。例えば、近代化の問題についての探求はまさにその通りである。そのほかには、学術領域で言えば、基本的には人文科学の分野に属しながらも、社会科学の色彩も持ち合わせている。例えば、日本の教育問題の分析にあたっては、データを基本にする分析方法はそのひとつであると言えよう。現代の日本研究の中では、方法論の視角から見れば、ライシャワーモデルは従来の研究を超えたか超えていなかったかのように見えて、重要な意義を持っている。逆に言えば、だからこそ、70年代になると、日本研究の主流が新しい方法論を用いた研究にとって代わられたのは当然である。

### 三、ヴォーゲルの試み

——日本文化研究の新流派（70年代）

70年代、日本学の研究界に新人が現れた。米国学者のエズラ・F・ヴォーゲル（1930—）である。ヴォーゲルは戦後育ちの新型学者で、本来は社会学者で、若い時近代社会を考察しようとして、日本を異質文化の国ととらえて近代社会の一類型として日本を選び、日本を対象にして研究を始めた。早期の著作『日本の中産階級』は日本の家族と社会問題を考察して得た成果である。後年ハーバード大学東アジア研究所の所長となり、視野は次第に国際問題へと広がった。彼は、近代日本の急速な発展と成果に驚き、二年間日本で現地調査を行って、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を書いた。この著作は米国及び他の国々の世論と学界に大騒動を起し、彼は一躍有名になり、ライシャワーに継ぐ著名な日本学者の一人となった。

ヴォーゲルの日本文化研究は70年代の流行となり、米国と日本で強烈的な反響を呼び、ライシャワーも「標題だけ見ても、この著作は多くの米国人に強い衝



撃を与えざるを得ない」と語ったほどである。これほどはやっていた主な原因の一つは、ヴォーゲルの日本論と日本社会文化論が、当時の社会情勢の変化に適していたからである。70年代、米国を始めとする西側諸国は、経済、社会とその他さまざまな危機に直面していた。特に経済面では労働生産性が明らかに低下し、ベトナム戦争の失敗も加わって、世界覇権の地位が揺らぐ前兆が現れた。逆に、同じ時期には、日本は迅速に経済成長が実現し、世界の「経済大国」へと躍進し、西側先進国と発展途上国に注目されてきた。新たな転換期に入ったと同時に、日本国内では傲慢な大国主義感覚が生じてきた。ヴォーゲルの日本探求の研究成果は米国への警告となり、まさに危機感と自信の需要を満たしたこととなり、米国の各界に重視され、日本でも高い人気を得て、日本研究の力作であると推奨された。

ヴォーゲルモデルの日本研究が大きな反響を呼んだのは、明確な社会的機能を有していたからである。ライシャワーのように直接米国の対日政策の決定や対日工作の第一線で働いたことはなかったにもかかわらず、全社会への貢献から見れば、彼の目的はライシャワーより鮮明で、社会的効果もさらに顕著である。彼はベネディクトからライシャワーへの延長線を大きく前進する一步を踏み出した。

ヴォーゲルの日本研究の社会機能は、その研究の出発点においてすでに現れていた。彼の名著『ジャパン・アズ・ナンバーワン』にはサブタイトルがついている。それは「アメリカへの教訓」である。彼は日本の政治、社会、経済の一般を分析し、多くの企業を調査し、それぞれ一章を設け、米国人に対するこの研究の意義を指摘し、「西洋は東洋に何を学ぶべきか？」と明確な命題を提示した。この点から言えば、ヴォーゲルはライシャワーのようにただ象牙の塔の中にとじこもっていたのではなく、直接に政策立案の視点から問題を提起し、研究課題を設定して分析を加え、結論を出した。しかし、ヴォーゲルは学者であって、具体的な政策部門にサービスを提供するのではなく、あくまでも社会全体の関心事を捉えていた。

彼の日本研究は、実に直接的・爆発的な社会的機能を生んだ。例えば、ヴォーゲルは日本企業の組織構造、従業員の心理状態、組織運営のメカニズムを細かく分析し、日本企業の経営管理を具体的に解剖して、米国企業の生産性を高

めるための処方方を提示したと言える。その後、いわゆる「日本的経営」は米国社会の一般的な関心を集めて重視される目標になった。米国の多くの一流企業は争って講習会を開催し、太平洋の向こう側から日本の企業家と経営研究者を招き、経験を紹介してもらったりしたのみならず、多くの歴史のある米国大企業が「日本的経営」のいくつかの方策を試行した。この日本的経営を学ぶ風潮は、まさにヴォーゲルモデル日本研究の社会機能の典型的な例証である。実際、ヴォーゲルは自分の研究成果が米国の直面したさまざまな危機を解決できるだけでなく、米国の対外政策にも影響を与えると自負していた。動機から観察するにしても、効果の例証を見るにしても、ヴォーゲルモデルの日本研究の社会機能は日本学史上で味わうべき例証を残した。

しかし、日本研究に対する貢献はヴォーゲルのその社会機能ではなく、もっと重要なのが、日本研究の新しい研究方法を提起したことで、「日本学」、特に日本社会文化研究の新しい境地を切り開き、新しい天地を現出させたことである。

学術研究の学科から言えば、ヴォーゲルモデルの日本研究は社会学手法の応用であるが、根本から言えば、彼の最初の動機は日本を対象にした一種の事例研究である。彼本人の言うところによると、「その研究対象として日本を選んだのは、何も私が日本の専門家を自認していたからではない。それどころか日本については知らないことばかりだった。それでも敢えて取り上げたのは、近代国家のなかで日本が最も異質であり、したがって近代社会についての仮説を検証するのにいちばん問題を提起しそうな国だと思ったからである。」<sup>i</sup> 結果的には、彼は事例研究から出発して、日本研究の領域に到達して、日本研究者となったが、「私は日本の家族の生活の内面を掘り下げることにして、一般理論は他の研究者にまかせることにした」とも告白している<sup>ii</sup>。要するに、彼の日本研究は全体が一種の具体的な事例研究手法で貫かれていて、研究作業の過程で、各部分もすべて事例研究で、主としてデータの調査と定量的分析の手法をとっている。

ヴォーゲルの研究成果を見ると、前の『日本の中産階級』と『ジャパン・アズ・ナンバーワン』にしても、その後の『日本の成功と米国の復興』にしても、それらのいずれも、基本的に事例を選び、データを分析する研究手法を使った。

研究作業にあたっては、彼は殆ど理論の枠組みを考えず、もっぱら具体的な事例を調査して、その分析を通じて結論を出していた。経団連の三好崇一専務理事はかつて筆者に「ヴォーゲルには幾度も会った。具体的な企業の情報を紹介してほしいと頼まれ、数え切れないほど大量のデータをヴォーゲルに『インプット』した」と語ってくれたことがある。実際、このような基本手法がヴォーゲルの日本研究の各方面を貫いている。言うまでもなく、ヴォーゲルは社会学の出身で、彼の日本研究に自ずと社会学の印跡を残している。しかし、客観的に見れば、彼は社会学の研究方法論を日本学研究に応用して日本研究に新風を吹き込み、日本研究の新しい領域を切り拓いたと言える。

米国の日本研究の歴史過程から見ると、近代以降、学術領域と研究方法論の面で極めて大きな変化が現れた。それぞれの変化は、日本研究の新しい発展を促した。まず、40年代にルーズ・ベネディクトは文化人類学の研究方法を日本学に導入し、「もともとは未開部族の研究をしている人類学者の関心を現代社会にひきつけよう」とし、「複雑な近代国家の諸問題を人間の個人的心理次元に還元しよう」として、大きく日本研究の範囲を広げた<sup>iii</sup>。そのうちに亜流が出てきたとは言え、ルーズ・ベネディクトは日本研究、特に日本文化研究の新しい領域を拓いたことは事実である。

その後、50年代から60年代にかけて、ライシャワーは伝統的な歴史学手法を応用して日本問題を探求し、主に日本の近代化問題について日本研究を新しい次元へと推進した。これらに対し、ヴォーゲルの貢献は、社会学の研究手法を日本学に導入し、日本研究における事例研究を強調し、問題研究（Problem Studies）の先鞭をつけた。まとめて言うと、70年代以降、「現代日本研究」（Japanese Studies）が流行となり、事例研究と問題研究の面で多くの著作が現れたが、これはヴォーゲルが70年代に実施した挑戦と密接な関係があると考えられる。彼の挑戦は主に研究手法面での上述の変革と具体的な研究対象上の選択の試行に現れているが、その結果、日本研究は方法論の上での変革を起こした。これはヴォーゲルモデルの日本学への一つの重要な貢献である。

#### 四、方法論上の「革命」

ライシャワーからヴォーゲルにかけて、米国の日本研究は新しい段階に入った。諸国の日本研究にも新風が現れ、研究方法と学術風格の変化を引き起こした。社会学手法の事例研究は、日本研究の領域で多く現れた。系統的な資料の実証的研究を伝統にしてきた日本の学界さえも変化し、20年来、事例研究手法で書いた日本論、日本人論、日本文化論などの著作が相継いでいた。米国では、利益交換原則によって日本の雇用制度を分析する研究が注目されていたし、東南アジア諸国では日本経済の具体的な諸問題についての研究が歓迎された。オーストラリアでは、日本の具体的な問題を内容とする研究成果もアカデミックな日本学研究の列に加えられた。

しかし、ヴォーゲルモデルの意義は、その種の流派の研究が盛んであるということにあるのではない。筆者は、日本研究におけるヴォーゲルモデル成立の意義を指導思想と方法論上での壁を破るものととらえ、これまでの日本研究に与えた衝撃は上述の流派の変遷をはるかに超えて、日本研究の今後の方向に影響を与えるものとする。このような問題を提起したのは、主として以下の二つの原因に基づいている。

第一、日本学の研究対象——日本は一つの総合システムとするか、それとも個々に切り割れている部分とするか？この問題にどう答えるか、ヴォーゲルとそれ以前の日本研究の間に方法論上の根本的な区別が見られる。ライシャワーモデルの日本研究は、全体的に日本を把握し、日本を一つの体系として見ていたが、ヴォーゲルモデルの日本研究は研究対象としての日本の各方面の局部に多くの注意を払っていた。ライシャワーの代表作『日本人』で検討している内容には政治、経済と文化等の各部分が含まれてはいたが、このような区分の目的は、日本という研究対象を異なる視角から観察することであった。彼の頭脳では、日本は一つの完璧の整体であった。

しかし、ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』について言えば、検討の内容は日本の政治、政府、企業、教育、福祉と社会治安にまでわたって、さまざまな面に触れているが、彼の考えているところでは、一つの全体の各個別面を考察するのではなく、それぞれの局部は日本という研究対象から切り取

られた切片で、一つ一つの部分を見ようとするものである。彼は社会学の事例分析手法を顕微鏡として使い、それらの切片を観察した。このような変わり方は、「近代日本研究が次第に学科の分化となり、学科区分は日増しに細分化され、研究対象も微視的になった」という基本的な傾向に合ったけれども<sup>iv</sup>、ヴォーゲルモデルが日本研究史上に引き起こした衝撃の大きさは、これまでに及ぶものはなかったほどである。日本というこの研究対象からある部分を切りぬき、これに精細な考察を加える。これが、ヴォーゲルモデルのひとつの大きな特徴で、日本研究に基本方法論上の一大革命を成し遂げた。

第二、伝統文化を重視し、内在的要素を重視するか、それとも現実形態を重視し、外面的形態を有する顕在的要素を重視するか？如何にこの問題に回答するか、これもヴォーゲルモデルの日本学研究方法論での革命の今一つ大きな根拠になっている。ライシャワーモデルの日本研究では、主として日本の伝統に力を入れて研究し、日本という研究対象の内面的要素を探索し、その文化的側面に焦点を絞っているとすれば、ヴォーゲルモデルの日本研究では、これらの文化的要素の外的形態に注目し、日本文化の物的側面、その顕在化したものに多く光をあてて分析しようとしていると言えるかもしれない。ライシャワーの代表作である『日本人』では、作者は日本人の精神世界と日本文化の伝統的体系を対象にして注意深く分析を行っている。例えば、権威と規律等日本人の内面的認識を特に取り上げて論じている。教育問題等比較的外面的形態を持っている対象にしても、ライシャワーは依然として日本人が教育を重要視する姿勢、その伝統と考え方等内面的なことを問題にしている。ライシャワーから見れば、伝統と現代は分けられないものであるので、外的形態を持っている現象はあくまでも内的要素が外に出している物的具象で、その根拠は東洋文化の伝統に根ざしているのである。

逆に、ヴォーゲルの代表作である『ジャパン・アズ・ナンバーワン』では、これらの文化的要因が殆ど論及されていない。形のあるものと形のないものの両者の中、彼は主として形のあるものを取り上げて、切片として観察することが多い。彼は主として政府の構成、企業の組織、制度、或いは国民教育に関する定量的なデータ、政治体制中の利益配分方式等を中心にして論じている。要するに、何れも見ることができ、触ることができる現象を対象にしているの

ある。極端な言い方をすれば、この二人の研究方法は二通りの志向があって、対照的になっている。ライシャワーはなるべく有形の現象を無形の素因に抽象して、その背後にある原因を探り出そうとしているのかのように見える。ヴォーゲルの場合はむしろ逆の探求方法を用いていると言える。彼はなるべく顕在化しにくい要素を除外して、触ることができるもの、見ることができるものを局部として選び出して、これらのパーツを摘出したり、切り出したりして、主として定量的に考察を進めていく。極端に言えば、彼は内面的要因を現象に顕在化して研究対象とするかのように見える。

要するに、ライシャワーは常に「素質」と「心理」を探っているが、ヴォーゲルとなると、これらはいずれも形のある「制度」、「行為」、「原則」または「組織」等に転換されてしまう。外面化して顕在化した現象と形のあるものを重点とし、その背後にある掴みにくいものを排除する。これがヴォーゲルの日本学研究の特徴と言えなくもない。

実のところ、上記二つの面は相互に関連しているとともに、いずれも方法論的原則に由来していると思う。簡単に言うと、一つは切り取り、今ひとつは有形の現象への重視である。両方を合わせると、方法論的に見れば、内面的要因と顕在的現象の分離を行うことになる。ヴォーゲルは日本学研究に新しい境地を作り出したが、そこが大きな原因の一つになっている。本人が意識しているかどうかを別にして、研究方法論の視野から見れば、ヴォーゲルの研究スタイルについて言えば、基本がここにあるのではないかと思う。

ライシャワーとそれ以前の日本学研究は、方法論的に見れば、日本を全体として把握し、歴史的要因を重要視する傾向にあったと言える。無意識的であったかもしれないが、ヴォーゲルはこの骨組みをうちやぶって、全体から社会的現象を切り取って、これらパーツの外面的意義を強調している。それまでの日本学研究は種々の内面的要素について分析を行ったが、ヴォーゲルの研究では「制度」、「組織」と「原則」に「顕在化」され、細かく分析されている。

この方法論的変革については、ヴォーゲルは詳しく自分の考え方を明らかにした。彼の言うところによれば、「まず私が思い立ったことは、勤勉、忍耐力、克己心、他を思いやる心といった日本人の美德と考えられる特質を検討してみることだった。しかしながら、日本人の組織、財界、官僚制などへのかかわり

方を調べれば調べるほど、日本人の成功はそのような伝統的国民性、昔ながらの美德によるものではなく、むしろ日本独特の組織力、政策、計画によって意図的にもたらされたものであると信じざるをえなくなった。」<sup>v</sup> まさにその通りなのかもしれない。

ヴォーゲルの話は簡潔であるが、彼の日本学研究方法をはっきりと示している。繰り返しになるかもしれないが、方法論的に言えば、ヴォーゲルは日本学研究の最初にあたって全体のシステムからパーツを切り取って、それを「組織」、「政策」、「計画」等顕在的形態に転換させて研究を進めていく方針を決めたのではないと思う。更に詳細に見れば、ヴォーゲルは主として「分離」の作業を行うのである。まず、社会現象と経済現象を文化的システムから分離する。次に人と物を分ける。結果的には精神世界と顕在的制度を切り離してしまう。具体的な分析手法について言えば、ケース・スタディを中心に、データを基にして数量的分析を行う。この基本的原則と研究手法は日本研究を大いに変革し、まったく新しいスタイルの日本学研究を築き上げた。

## 五、重要な課題

——方法論についての思索を重視しよう

日本学研究はライシャワーからヴォーゲルへと移り変わって、方法論的に大きな「革命」を経験した。本論文では方法論の視野から比較を行いながら、二人の日本学研究の特徴を浮き彫りにして分析を進めてきたが、単なる方法論の考察にとどめることなく、われわれの日本研究にも役立てようとするものである。われわれの研究状況に合わせて考えれば、種々思索を巡らさざるを得ないところがあると思う。

第一、如何に学術的研究と社会的機能との関係をうまく関連付けるか。長い間、われわれの研究作業では、これは悩みの種である。学術的性格を強調するものもあれば、政策立案に役立てようとするものもある。さらには、基礎的研究を唱えるものもあれば、応用的研究を推進しようとするものもある。時にはこれらの議論が激しく、結論がなかなか出ない。ライシャワーとヴォーゲルの日本学研究はそれぞれ長短があるが、学術的研究と社会的機能との両立はある

いは一つの共通特徴になっていると言えるかもしれない。逆に言うと、彼らの研究が成功し、世人の注目を集めた原因の一つがそこにあるのではないかと思う。大きな問題として映っているかもしれないが、実質的には方法論の問題とも言える。

考えて見れば、ライシャワーはアメリカの対日政策立案の要職についているが、時には象牙の塔に閉じこもっているかのようにも見えている。ヴォーゲルは大学の教授であるが、彼が社会変化の需要を敏感にキャッチしていた。それぞれの特色もっているが、彼らの研究方法はさらに探究されるべきであるかもしれない。

第二は、それぞれの研究方法ではそれぞれ特徴のある研究ができることである。ライシャワーは大局を見る目を持っているし、ヴォーゲルは切り取りのケース・スタディを行って、意表をつく結論を出すことが多々ある。もちろん、各種の研究方法には、それぞれの特徴があるので、良いか悪いかというような価値判断をすることができない。そのため、簡単に独断するわけに行かず、研究方法の多様性が認められるべきである。ライシャワーは学究と見られることが多いが、その研究は案外普通の人たちにも読まれている。ヴォーゲルは日本研究の新しいブームをよびおこしたが、数年たたないうちに冷めてしまう兆が出てきている。一部のアメリカ企業家たちは、彼の肢体切断の手術が実験の結果としてそれほど効かないとこぼしている。全体から見れば、彼らの研究はわれわれの参考に十分になれる。ここ数年来、一部の学者たちは、われわれの日本学研究には恣意性があって、他人の影響を受けやすいし、時には実態の伴わない「概念の運動」が見られると指摘している。外の原因を除いては、方法論の問題も大きな原因の一つとなっている。諸外国の研究の方法を分析して、われわれの日本学研究に役立てようではないかと思われる。

一つだけ注意を喚起したいと思うが、方法論の研究はあってもなくてもいいものでは決してない。われわれの日本学研究を推進するためには、諸外国の日本学研究の方法論を参考にして、研究方法を思索して確立することは重大な意義もっている。ある意味では、このような研究方法論を勉強することは、今後日本学研究推進に重大な課題となっていると言わざるを得ない。

結論的には、研究について言えば、方法論はおろそかにしてはならないもの



である。われわれの日本学研究を推進するためには、諸外国の日本学研究の方法論についての究明と方法論に関する思索は十分に重要視すべきことである<sup>vi</sup>。

---

注釈：

- i (米) エズラ・F・ポーベル『ジャパン・アズ・ナンバーワン』序文、日本TBSブリタニカ、1979年6月、P1
- ii (米) エズラ・F・ポーベル『ジャパン・アズ・ナンバーワン』序文、日本TBSブリタニカ、1979年6月、P1
- iii 綾部恒雄編『文化人類学15の理論』（中央公論社、1984）を参照されたい。
- iv 高 増杰「日本学と日本文化研究」、『日本問題』1990年第1号、P37
- v (米) エズラ・F・ヴォーゲル『日本アズナンバーワン』序文、日本TBSブリタニカ、1979年6月、P3
- vi 本論文は作者が1990年9月『日本学刊』第3号に発表したものを基にして手を加えて日本語に訳したものである。その中、「一、方法論についての思索」は論文の由来についての解説みたいなもので、当時の中国の日本文化研究の状況がうかがえるものと思って敢えて追加執筆したものである。二節から五節までは当時の論文の内容で、基本的にそのまま翻訳したものである。なお、二節から五節までの訳文は足立原貫氏の訳文を参考にしたところが多い。